

文化の相違とロンドンの憂鬱

——黄遵憲の西洋体験をめぐって——

張 偉 雄

一、二首の離別詩

黄遵憲の詩文集を読んでもみると、一つ鮮明な傾向をみて取れる。つまり、彼の詩的情緒は、彼自身の置かれていた違う文化環境によって、大きく左右されていたということである。黄遵憲は一八八二年春、日本駐在公使館での任期を終えた後、アメリカ、イギリス、シンガポールなどの順に、外交官を歴任した。かれの詩文集には、これらの国々で受けた詩的感動が残っている。

黄遵憲の詩集『人境廬詩草』のうち、巻四にはアメリカ時代の詩が、巻六にはイギリス時代の詩が、巻七にはシンガポール時代の詩が、それぞれ収められてある。日本に関する詩は『日本雜事詩』にまとめてある外に『人境廬詩草』巻三の中にも、黄遵憲が日本友人と唱和した詩が記載されている。以上のような各国に滞在中に書いた詩の中で、日本とシンガポール時代の詩には所在国の政治、人情、風俗習慣などに関する叙事的な詩の外に、友情を讃

える叙情的な詩も多く見られる。一方、アメリカとイギリス時代の詩の中には、同じくその国々の政治、人情、風俗習慣に関する詩はあるが、友情を詠う詩は一つも見られない。反対に不満、反撥、孤独、憂鬱などの感情を吐露したものが多く見られる。以下にまずアメリカ時代の黄遵憲の心情を反映した詩を見てみよう。

光緒十一（一八八五）年、乙酉秋、三十八歳の黄遵憲はアメリカの任を終えて、中国に帰る途中、ちょうど仲秋十五夜がめぐってきた。船中の黄遵憲は「八月十五夜太平洋舟中望月作歌」という七律長詩を書いた。盛唐詩人王维が歌った「独り異郷に仕りて異客と為り、毎に佳節に逢いて倍ます親を思う。」のように、黄遵憲にとってはこの遠い故郷に対する思念は、強烈なものがあつたはずである。しかし、違う文化をもつ同船の西洋人は、誰一人彼のこの気持ちを察してくれない。黄遵憲は悲しく詠った。

大千世界共此月

世人不共中秋節

泰西紀曆二千年

祇作尋常数圓缺

舟師捧盤登舵樓

船與天漢同西流

虬髯高歌碧眼醉

異方樂祇增人愁

大千世界 此月を共にするも

世人 中秋節を共にせず

泰西紀曆 二千年

只 尋常圓缺を数ふることとす

舟師 盤を捧げ舵楼に登りて

船は天漢と同じく 西流す

虬髯高歌 碧眼の酔

異方の楽 只 人愁を増す^{*1}

同船の西洋人が中国人の中秋節の心情が分っていないことに、黄遵憲は非常にさびしく感じていた。文化の違いによつて、互いの理解が取れないがゆえに生じた孤独感が、あらわに表出した。異郷に知己がない。まわりの異国人が酔つ払つて声高く歌っているのを聞いて、ただ憂愁が増すだけなのである。振り返つて思えば日本にいた時とはだいぶ違う。友人宮島誠一郎の黄遵憲に送った詩の中に、「霞館秋吟明月夜 麴街春酌早桜天」（霞館 秋明月の夜を吟す 麴街 春早桜の天を酌す^{*2}）、という句がある。このような「秋吟」「春酌」を共にできる友人に、西洋においてはずいぶん恵まれなかった。四年前アメリカと同じく四年間の日本任期を終え、黄遵憲は離日に際して、「奉命為美国三富蘭西士果総領事留別日本諸君子」という詩を書いた。

海水南旋連粵嶠

斗星北望指京華

但煩青鳥常通訊

貪住蓬萊忘憶家

一日得閑便山水

十分難得是桜花

白銀宮闕吾曾至

歸與鄉人信口誇

海水南旋して 粵嶠に連なる

斗星北望して 京華を指す

但だ青鳥 常に通訊するを煩ふ

蓬萊に貪住して 家を忘憶す

一日閑を得て 便ち山水

十分得がたき 是れ桜花

白銀宮闕 吾曾て至る

歸りて 郷人と口に信して誇らん^{*3}

これはアメリカを離れ、帰国の船中に噴出した黄遵憲の感情とは、全く別のものである。「貪住蓬萊忘憶家」日本に対する愛情が故郷に対するそれをも越えうるほどのものであると誇張して言う。彼は住み心地のよい異国日本において、友人との親交の中では、故郷に匹敵するといふのもあながち誇張ではないほどの好意を、実際に日本に対して感じたこともあったかもしれない。彼は日本において、「知己」を見つけたのである。彼は「留別日本諸君子」の詩で次のようにも歌っている。「海外偏留文字縁 新詩脱口每争傳」（海外 偏へに文字の縁を留む 新詩脱口する毎に 争伝す^{*4}）。海外日本で、黄遵憲は文字の縁を結ぶことができた。自分の書いた詩を争って読んでくれるほど、かれは己を知る友人を得て、自分の異国での存在意味も十分に感じられていた。したがって、かれは日本を離れるとき、「貪住蓬萊忘憶家」と歌い、離別を惜しむ気持ちがいっぱいであった。しかし、これはアメリカを離れた時、全く正反対の相貌を呈していた。このような違いは、一体どのような状況下に生じたのか、次にいくつかの角度から考察してみたいと思う。

二、政治的な原因

一八八二年、ちょうど黄遵憲がアメリカに赴任したその年に、アメリカ政府は『排華法案』を制定し、渡米した中国系住民に対する排斥的な立場をとった。^{*5}中国系住民は大きな危険にさらされていた。虐待され、殺された例も多くあった。外交官としてアメリカに赴任したばかりの黄遵憲自身も、ピストルを、突きつけられて、脅かされたことがあった。彼の「續懷人詩」の中に傅烈秘という同僚を賛えた詩があったが、詩の自注に、その時のことを次のように書いている。

中国労働者を制限する条例が施行されてもない時、中国の船が到着するたびにわたしは傳君と視察に行っていた。ある日税関を通る時、そこには労働者が集まっていた。中の一人はピストルを取り出し、私たちに突きつけて「もし中国人を入国させたら、この弾をくれてやるぞ」と言った。傳君は靴の中に入れてあったピストルを握り、笑いながら「君、やれるのか。」と答えた。^{*6}

このような緊迫した国際情勢のさなか、総領事としての黄遵憲の神経は常に極度の緊張状態にあったことであろう。当然詩文に興じている余裕はなかったのである。当時彼は専ら中国人の権利を保護する仕事に奔走していた。黄遵憲の故郷広東省梅州市の博物館には、黄遵憲がアメリカのサンフランシスコ駐在総領事に就任していた頃に、アメリカ、スペイン、ペルー駐在大臣鄭藻如に出した書類の原稿が保存されている。現存二十五編にもなるこれらの原稿は、すべて当時アメリカ在住の華僑たちの待遇を改善するための提言などであった。^{*7}中国系住民の利益を守るために、黄遵憲が多くの努力を果たした。こうした黄遵憲の苦心の様子を示すものとして、『清史稿』に黄遵憲のことについて、次のようなエピソードが紹介されている。

ある時、アメリカの官吏が、衛生問題を口実に多くの華僑を逮捕した。監獄は、ぎゅう詰め状態であった。黄遵憲は自ら監獄に赴き、牢屋の一人当たりの面積など生活状況を調査したあと、アメリカ官吏に対して次のように質問した。「この衛生状況は華僑の住居地より良いと言えるのですか？」と。アメリカの官吏は答える言葉も

なくて、やむえず華僑たちを釈放した。^{*8}

外交官として自分の代表している国と赴任した国との関係が、これほど緊張状態にあつて、いい気持ちを持たないのは当然であろう。アメリカにおける黄遵憲の憂鬱には、このような国際政治による原因が大きいように見える。しかし政治的な原因は、より厳密には、後に渡ったイギリスの場合をも含めて、詩情に表した黄遵憲の憂鬱を引き起こしたすべての原因でもないようである。次にイギリス駐在していた時のことを見てみよう。

一八九〇年黄遵憲はイギリス大使館二等書記官に任命された。イギリス時代の黄遵憲の仕事は、いわば閑職であつた。当時の「出使英法意比四国大臣」薛福成の『出使英法意比四国日記』^{*9}によると、大使館での黄遵憲の仕事は、發送する書類の整理などの些末な雑事ぐらいであつた。日本やアメリカ駐在の頃のように、国間に起きている重大案件を取り扱い、政治的な理由で神経が引き締まっていたこともなかった。しかし、黄遵憲は今までに見なかつたほどの憂鬱に襲われていた。彼は「重霧」という詩の中でその時の状況を次のように書いている。

碌々成何事

有船吾欲東

百憂増況瘁

独坐屢書空

碌々とし 何事をか成さん

船有らば 吾東せんと欲す

百憂 増して 沉醉る

独坐して 屢 空を書す^{*10}

毎日無為無策に時間を過ごし、かつて日本にいたときのように、友人に囲まれて国を超えた文人の趣味を楽しむこともなく、アメリカ時代のように、厳しい外交実務に携わることもない現実には、黄遵憲にとって耐え難いものであった。このような生活を、黄遵憲は「寄懷胡曉岑同年」という詩の署名のあとに「光緒辛卯夏六月、自英倫使館之搔痒處書寄」などと書き加えていた。大使館の部屋を「痒い所を搔く處」だと、アイロニカルに表現して、その間の退屈さを物語っている。黄遵憲は「有船吾欲東」と船があれば、東方の国に帰りたいと望んでいたのである。イギリスで深まった憂鬱を、彼は「鬱鬱」という詩に盛り込んだ。

鬱鬱久居此

依依長傍人

梨花今夜雨

燕子隔年春

門掩宮何冷

燈孤僕亦親

車声震牆外

滾滾尽紅塵

鬱々として 久しくここに居る

依々として 長く人に傍ふ

梨花 今夜の雨

燕子 隔年の春

門掩うて 宮何ぞ冷たからん

灯孤 僕亦親しむ

車声 牆外を震わし

滾々として 尽く紅塵^{*11}

イギリス時代において、黄遵憲はアメリカ時代ほど、華僑の利益保護のために激務に追われ、外交上の摩擦に起きるストレスが溜まっていたわけでもなかったようである。そうであれば、西洋の国々における黄遵憲の憂鬱は、単に政治的外交的な原因に帰せられるものでもないことがわかる。異文化に放り出された一個人の異国での「憂鬱」というものは、より直接的な、個人のアイデンティティーに関わる文化的な原因によって、醸された部分が多い。たとえば、黄遵憲の在日期间中、中日関係に政治的な摩擦がなかったわけではないのである。琉球問題や朝鮮問題は、当

時中日間において、一触即発ほど緊迫していた外交問題であった。黄遵憲は清朝政府の代表として、琉球問題や朝鮮問題に関して、多くの方策を提示し、積極的に日本の明治政府との交渉にあたってきた。外交官として黄遵憲は清朝政府の利益を代表して動いていた。しかし、一方彼はまた文人として、政治以外に個人的な友情を温める場が多くあった。政治に影響されない個人的な付き合いが、日本において、可能であった。これは黄遵憲が日本において憂鬱な状態にならなかつた重要な原因でもあった。政治を超えた個人個人の付き合いは、黄遵憲に客観的に日本を観察する余裕を与えていた。

三、文化的な原因

黄遵憲が西洋に滞在していた時、憂鬱な状態に陥つた原因として、文化的な側面に起因するものが多い。彼の西洋文化についての予備知識は多くはなかつた。コミュニケーションの道具としての言語能力も高くなかつた。日本では有効だつた筆談もちろん通用しなくなつた。彼は通訳なしには、駐在国の人々と思想感情の交流を行うことが難しかった。交流ができれば、自分自身によって示すことが可能であつたはずの自国の優れた伝統文化も、大して相手に理解され、尊重されている気配も感じられない。ともすれば、黄遵憲の存在自体も尊重されていないように感じてきた。こういう状態は日本に駐在していたときとは大いに異なっている。黄遵憲の生きていた時代において、文化的に日本ほど中国の文人にとって過ごしやすい国はなかつたであろう。黄遵憲と同時代の王韜の例を見てわかるように、かれは、ヨーロッパにも日本にも滞在した経歴をもつが、彼のヨーロッパ旅行記『漫遊随録』と日本旅行記『扶桑游記』の両書を比較してみると、やはりヨーロッパよりも日本のほうが馴染みやすい、多くの友

人に恵まれていたことがわかる。彼は『漫遊随録』の序に次のように書いている。

日本の山水はヨーロッパより美しかった。また同文の国であるから、文詞詩賦を盛んに唱和することができた。文字の縁、友人の楽、これを海外にみつけるとは大変不思議な気持ちであった。^{*12}

これと同様な感覚を黄遵憲も日本で得ていたが、西洋の国においては得られなかったばかりか、敵対的な目差しさえ感じていた。アヘン戦争によって無残にも中国人のプライドをつぶした英国人の目には、中国人はどの程度の存在であったのか、黄遵憲に十年ほど遅れて倫敦に訪れた夏目漱石の倫敦滞在時の感想から、伺うことができる。明治三十四（一九〇一）年三月十一日の日記に、夏目漱石は次のように書いている。

日本人を観て支那人といわれると厭がるは如何。支那人は日本人よりも遙かに名誉ある国民なり。ただ不幸にして目下不振の有様に沈淪せるなり。心ある人は日本人と呼ぶるよりも支那人といわるるを名誉とすべきなり。仮令然らざるにもせよ日本は今までどれほど支那の厄介になりしか。少しは考えて見るがよからう。西洋人はややともすると御世辞に支那人は嫌だが日本人は好だという。これを聞き嬉しがるは世話になった隣の悪口を面白^{*13}いと思つて自分方が景気がよいという御世辞を有難がる軽薄な根性なり。

夏目漱石のこの発言から、間接的に中国人の置かれていた境遇が分かる。所詮三等以下の民に過ぎないであろう。

黄遵憲は夏目漱石が「御世辞」として感じていた偽善的な友好でさえ感じられるすべもないのである。「感事三首」において、黄遵憲次のように不平をこぼしている。

堂々大国称支那

文物久冠亜細亞

流沙被徳広所及

却特威遠蔑以加

堂々たる大国 支那と称す

文物久しく 亜細亞に冠す

流沙 徳を被りて 及ぶ所広し

却特の威遠く 蔑するに以て加う^{*14}

堂々たる大国が昔から文物がアジアの中心を据え、西の国々にも影響を与えていた。その大国が今日蔑視されている。黄遵憲は心を痛めている。アメリカ時代において、黄遵憲は「逐客篇」と題する詩の中で、華僑がアメリカで差別扱いされていることに憤慨し、つぎのように歌っている。

皇華與大漢

第供異族諱

不知黒奴蠢

随处安渾噩

堂々龍節来

叩関亦足躩

倒頃四海水

此恥難洗濯

皇華と大漢と

第に 異族の諱に供す

知らずや 黒奴の蠢

随处に 渾噩に安ずるを

堂々として 龍節来たるも

叩関するに 亦 足躩たり

四海の水を 倒頃すれども

此恥 洗濯し難しい^{*15}

文化大国である皇華、大漢が異国人に欺かれ、堂々たる大清皇朝の使節ともあろう者が、理不尽な差別を受けている。これは黄遵憲にとって全く我慢ならないことである。このようなことはすべての海の水を取ってきても、洗いきれないほどの大侮辱だと彼は詩に詠っている。

このように自国の文化が認知されないうえに、異なった文化背景をもつ自分自身が、価値のないもののように扱われる。とくに自国の祭日などほんとうは楽しく過ごす日にも、このような状態が生じたとき、その憂鬱の甚しさが想像できよう。黄遵憲の心情は夏目漱石のロンドン時代に似通ったところが大いにある。異国で正月を送った漱石も、日本での正月のお屠蘇気分を感じることができなかった。彼が正月三日に書いた日記の中でロンドンの霧や太陽を「倫敦の町にて霧ある日、太陽を見よ。黒赤くして血の如し、鳶色の地に血を以て染め抜きたる太陽はこの地にあらずば見る能はざらん^{*16}」と描いていた。陰気で憂鬱なのは自然の風景だけではなかった。黒赤い太陽は実際の太陽であると同時に、夏目漱石の陰鬱な精神状態の投影でもあった。同じように「陰鬱な精神状態」にあった黄遵憲の目にも、ロンドンの町は実に全く同様な風景が映っていたのである。

天羅礧匝偶露缺

上有紅輪色如血

曖々曾無射日光

涼々未覺炙手熱

天羅 礧匝として 偶缺露わす

上に紅輪あり 色血の如し

曖曖として 曾て無し目光を射る

涼々として 未だ覺らず手を炙する熱^{*17}

また別の詩に「霧重城如漆 寒深火不紅」(霧重なりて 城漆の如し 寒深くして 火紅からず^{*18})と、重苦しいロンドンの町を描いていた。夏目漱石と同様に一人の東洋人として異文化の国に入り、黄遵憲も文化の違いや国力の違いによって生じた被差別を身近に感じ、個人的な不平不満を、一種の「憂鬱」として発露するほかに、何もできなかった。

一方、客観的に考えれば、自国の長い文明史に対する誇りを失しながらも、西洋列強の衝撃のもとで、自国は衰退の一途をたどっている現実も認めざるを得ないはめになる。これは実に癢に障ることである。この複雑な感情的な葛藤の中で、在米期間中、彼は自国のことを「軒項五千年 到今国極弱」(軒項 五千年 今に到りて 国極めて弱し^{*19})と嘆いたこともあった。反対に相手国の繁栄ぶりがいやなほど目につく。

民智益発揚

国富乃倍蓰

決決大国風

聞楽嘆觀止

民智 益発揚し

国富 乃わち倍蓰

決決たる 大国の風

楽聞きて 観止を嘆く^{*20}

国民の教育水準の高まり、国力の増大、これによってアメリカは堂々と大国の風格を呈している。黄遵憲は感嘆せざるをえない。ロンドンにおいても同じようなことを目のあたりにした。黄遵憲がロンドンに来て、幾日も立たない内に二回の盛大なパーティーに招待された。当時の駐英大使薛福成の一八九〇年三月十七日に書いた「庚寅三月十七日日記」に「私は黄公度、馬清臣を率いて、ウインザー宮殿へ行つた……宮殿に入ったら、まず朝堂へ居て宴会に招待された。」と記録されている。^{*21}この宴会場について、黄遵憲は詩一首を残している。

萬燈懸耀夜光珠

繡縷黄金匝地鋪

一柱通天銘武后

三山絶島勝方壺

万燈懸げて耀く 夜光珠

繡黄金 地を匝りて鋪く

一柱通天 武后を銘ず

三山絶島 方壺に勝る^{*22}

黄遵憲はイギリスの宮殿を、三山の英国が方壺の日本に勝つという表現で、その豪華さは日本以上であることを感嘆している。この日の宴会の四日後、黄遵憲は再び盛大なパーティーに招待された。同じ薛福成の日記に、「庚寅三月二十一日、英君主がバッキンガム宮殿でパーティーを開いた。各国の公使がまず君主を謁見した。皆鞠躬して通る。続いて大臣たちが入る。それから貴婦人たちが入る。君主を謁見した各国の貴婦人は千人に上っている。」とある。^{*23}

パーティーのあと、黄遵憲は長詩「感事三首」を書いた。彼は長い詩文を用いて、宴会の盛大さ、宴会場の絢爛さ、貴婦人、紳士たちの高貴な風貌などを描いている。しかし、この絢爛たる宴会場で黄遵憲は少しも楽しい時を過ごすことができなかった。文化の差異により、黄遵憲は溶け込むことができなかった。

衣裳闌斑語言雜

康樂和親權不諱

問我為何独不樂

側身東望三咨嗟

衣裳闌斑なるに 語言雜なり

康樂和親 譁しからざるを懽る

我に問う 何す為れぞ独り樂しまざるを

側身東望して 三たび咨嗟す^{*24}

華やかな衣裳をまとう賓客、耳になじまない異邦の言葉の響き、和氣藹々な様相はあるが、黄遵憲はそれに仲間入りさせてもらえない。平等に自文化の良さを示すことができず、甚だしきに至っては自分自身の存在さえ無視され、ただ受動的に相手方に振り回されるとき、そしてその相手方がわが方より遙かに富みを誇っているものだという事実を受け入れねばならない時、黄遵憲はいっそう大きな憂鬱を覚えたのである。彼の詩は宴会の豪華さを描いたあと、筆を変え、「問我為何独不樂 側身東望三咨嗟」と書き、東方の母国を眺望して嘆くほかないと詠った。

四、ロンドンの霧

黄遵憲がイギリスにいたとき、何度もロンドンの霧を描いている。それはまるでロンドンの大霧が憂鬱の原因であるかのような印象さえ読者に持たせる。黄遵憲は、霧をロンドンの、ひいては大英帝国の象徴とし、それを揶揄することによって、自分の不満を発散しようとした。かれの長詩「倫敦大霧行」では、何を偉そうに、お前たちの誇る首都は、寒くて暗くて空も見えないではないか！という勢いで、まるでロンドンの白人を一人でもつかまえて、

文句をいつているような口調である。

吾聞地球繞日日繞球

今之英属遍五洲

赤日所照無不到

光華遠被天盡頭

烏知都城不見日

人々反抱天墮憂

又聞地氣蒸騰化為雨

巧算能知雨点数

此邦本以水為家

況有竈烟十万户

倘將四海之霧銖積寸算来

或尚不知倫敦城中霧

吾聞くならく

地球日を繞りて 日球を繞ると

今之英属 五洲に遍ねし

赤日照る所 到らざる無し

光華遠く被さる 天の尽頭に

烏知らん 都城日に見えざるを

人々 反つて 天の墮つる憂を抱く

又聞く

地氣蒸騰 雨たるを化して

巧算すれば 能く雨点の数を知る

此邦 本水を以て家と為す

況わんや 竈烟十万户あるをや

四海の霧を将て 銖積寸算来すれば

或いは倘きこと

倫敦城中の霧に知かず^{*25}

英国は「太陽の沈まない帝国」どころか、首都ロンドンには日が見えないではないか、この空を隠してしまうほ

どのロンドンの霧の量は、世界各地のすべての霧を集めても、比にはならないと言って、巧みに皮肉っている。このような鋭い風刺、皮肉によって、他の詩に描かれているロンドンの宮殿の輝きは見事に殺されてしまった。この詩に描かれているロンドンには、恐怖に満ちた暗黒世界のように感じられている。前出の黄遵憲の詩に「有船吾欲東」船があれば、東方の国に帰りたいと詠っていた。ロンドンを離れたい気持ち強いことが分かる。

黄遵憲と同じく東洋人の夏目漱石は、自然現象の霧に、さらに工業の煤煙による大気汚染を厳しく指摘したことがある。前出の正月三日の日記を書いた翌日に、漱石はロンドンの空気について、「倫敦の町を散歩して試みに痰を吐きて見よ。真黒なる塊りの出るに驚くべし。何百万の市民はこの煤煙とこの塵埃を吸収して毎日彼らの肺臓を染めつつあるなり。我ながら鼻をかみ痰をするときは気のひけるほど気味悪きなり。」と書いて、相手の欠点をつかみ、抑圧されていた自分のもろもろの不満を発散しようとするねらいもあったのであろう。夏目漱石は後日帰国してからも、ロンドンに対する一種の絶縁宣告でもあるようなことを書いた。「謹んで紳士の模範を以て目せらるる英国人に告ぐ……自分の意志を以てすれば、余は生涯英国の地に一步も吾足を踏み入るる事なかるべし」^{*26}。これは黄遵憲の「有船吾欲東」の発言にも通じる主旨のものであり、黄遵憲の詩の隠然たる気持ちを明確化したものだとも読める。この二人の発言には、当時の東洋人種差別を臭わせていた西洋人の社会に対する強い反発が込められている。

五、アメリカで見た騒動

アメリカで最初に黄遵憲に悪い印象を与えたのは華僑排斥運動であった。そこから、黄遵憲は強い人種差別の悪を感じた。差別されたことに対して、黄遵憲は強い反感をもっていた。夏目漱石がかつて西洋人を「奴」と表現し

たのに対して、黄遵憲は詩の中で、西洋を「鬼域」と表現したり、西洋人を「虬髯碧眼」と描いたりしていた。これは当時では読者にいかなるイメージを与える表現であろうか。同時代人のある例を借りてみよう。一八四七年アメリカへ渡って、後に、イエール大学を卒業した中国人の容闳は、『西学東漸記』という自伝の中で、子供の頃、最初に「目は澄んだ青色に輝いて……髪は亜麻色、まゆ毛は濃いめ」の西洋女性に会った時のことを「こわさのあまり、私は父にしがみついて離れなかった。」^{*27}と書いている。黄遵憲の「鬼域」「虬髯碧眼」のような西洋人描写は、まさに容闳の子供時代に感じていたような怖い印象を残すものであった。このような描写により、差別されたことに対する逆差別とも言えるほどの仕返しを狙い、心中の鬱憤を晴らそうとした。

黄遵憲がアメリカへ渡って三年目の一八九四年、アメリカの大統領選挙があった。黄遵憲は高い関心を持って色々観察した。かれの目に映った大統領選挙は、両大政党が民衆を愚弄し、互いに攻撃し合い、いたずらに社会を混乱させているものでしかなかった。「紀事」^{*28}という詩の中で、彼の見たこの行事を記述している。選挙演説について、黄遵憲は次のように書いている。

此党誇彼党	看我後來績	通商與惠工	首行保護策
凡我美利堅	不許人侵軼	遠方黃種人	閉關嚴逐客
彼党訐此党	党魁乃下流	少作無賴賊	曾聞盜人牛
又聞挾某妓	好作狹邪遊	聚賭葉子戲	巧術妙竊釣

決して雰囲気のない選挙活動ではないことが分かる。党派間は互いに自分の方を誇示して、国民に利益保護のために、黄色人種を排斥することも辞しないことを宣言したりしている人もいるし、選挙の相手はごろつきであり、かつては人の牛を盗んだり、売春婦を買い、賭博をするものだと人身攻撃をする人もいる。文人黄遵憲にとって、これは甚だ滑稽なものである。秩序と面子を大事にする東洋人にとって、こういう騒々しい場面は、どうしても馴染めないであろう。詩の最後で、百年前のアメリカ式の民主主義的な選挙に対して、否定的な見方を示している。

烏知拳總統

所見乃怪事

怒揮同室戈

憤争傳国璽

大則釀禍乱

小亦成擊刺

烏んぞ知らん 總統を挙ぐるに

見る所 乃ち 怪事たりとは

怒りて同室の戈を揮い

憤りて傳国の璽を争う

大なれば則ち禍乱を醸し

小亦撃刺を成す

黄遵憲はこの選挙に現れた怪事をどうしても納得できなかった。このような選挙は国を混乱させるほかないと考えていた。このような見方は長い間彼を影響しつづけてきた。光緒三十（一九〇四）年、黄遵憲が亡くなる前に梁啓超に出した手紙の中で、次のような書いている。

アメリカ三年間滞在して分ったことは、共和体制を今日のわが国には絶対に実行してはいけないということである。在米中から、私は漸進主義を取り、君主立憲を最善とし、今日までその考えは変わらない。^{*29}

このような見解を生涯持ちつづけたことを見ると、黄遵憲がアメリカで受けた精神的なショックは相当大きかったことが分かる。近代中国において、積極的に外部の世界に目を向き、自国改革の栄養にしようとした黄遵憲は、時代的な局限性もあり、惜しくも西洋への接近に高い壁によって遮断されてしまった。百年も昔東西文化の相違を乗り越えることの難しさを改めて痛感するわけである。黄遵憲のケースにとどまらず、文化的な守備範囲を超えてしまったときに起きる「憂鬱」の解消は、異文化の双方が互いにたえず各自の守備範囲を拡大していく努力による他に良法はなからう。

注

- * 1 黄遵憲著 錢仲聯箋注『人境廬詩草箋注』上海古籍出版社 1981年 395頁
- * 2 宮島誠一郎「黄參贊公度君將辞京有留別作七律五篇」早稻田大学図書館蔵「宮島誠一郎文書」文書C 27・C 12
- * 3 同『人境廬詩草箋注』卷四341頁
- * 4 同『人境廬詩草箋注』卷四340頁
- * 5 陳依範『美国華人發展史』三聯書店香港分店 1984年 194頁参照
- * 6 同『人境廬詩草箋注』585頁「統懷人詩」第十二首自注
- * 7 華南師院中文系近代文学研究室校点「黄遵憲上鄭欽使稟文手稿」『黄遵憲研究』広東語文学会近代文学研究会
遵憲故居人境廬管理委員会編 1982年 11・59頁
- * 8 『清史稿』黄遵憲伝 中華書局 1977年
- * 9 薛福成『出使英法意比四国日記』岳麓書社 1985年
- * 10 同『人境廬詩草箋注』卷六「重霧」508頁
- * 11 同『人境廬詩草箋注』卷六「鬱鬱」565頁
- * 12 王韜『漫遊随録』序 岳麓書社 1985年
- * 13 『漱石日記』「ロンドン留学日記」岩波書店 1990年 46頁
- * 14 同『人境廬詩草箋注』卷四「逐客篇」362頁
- * 15 同『人境廬詩草箋注』卷六「感事三首」529頁
- * 16 『漱石日記』（明治三十四年正月三日日記）岩波書店 1990年 25頁
- * 17 同『人境廬詩草箋注』卷六「倫敦大霧行」509頁
- * 18 同『人境廬詩草箋注』卷六「重霧」508頁
- * 19 同『人境廬詩草箋注』卷四「逐客篇」353頁
- * 20 同『人境廬詩草箋注』卷四「紀事」377頁
- * 21 薛福成『出使英法意比四国日記』「庚寅三月十七日」岳麓書社 1985年

- * 22 同『人境廬詩草箋注』卷六「溫測宮朝会」506頁
- * 23 薛福成『出使英法意比四国日記』「庚寅三月二十一日」岳麓書社 1985年
- * 24 同『人境廬詩草箋注』卷六「感事三首」523頁
- * 25 同『人境廬詩草箋注』卷六「倫敦大霧行」509頁
- * 26 夏目漱石『文学論』序『漱石全集』第十四卷 岩波書店 1995年 13頁
- * 27 容闕『西学東漸記』東洋文庫136 平凡社 1969年 45頁
- * 28 同『人境廬詩草箋注』卷四「紀事」368頁
- * 29 黃遵憲 光緒三十年七月四日「致梁啓超書」鄭海麟 張偉雄編校『黃遵憲文集』223頁中文出版社 1991年